

佐藤博樹・佐藤厚編

『仕事の社会学 - 変貌する働き方 [改訂版]』有斐閣 (2012年)

新刊書ではないが、改訂版が発刊されたのを機に紹介する。本書は労働社会学のテキストとして2004年に初版が刊行された。日本の雇用労働について制度、実態、労働者の意識などを多面的に分析しており、学生だけでなく、労働組合関係者も基礎知識として身につけておくべき内容が豊かに盛り込まれている一冊である。

テーマごとに分かれた各章では、歴史的变化と国際比較が記述され、実証データの紹介と理論的整理がなされている。章ごとに著者が異なるので、書きぶりにも違いがあり、実証と理論のどちらに大きなウエイトをおくのか、著者の考えをかなり押し出さずか控えるかなど、やや統一感に欠けるきらいはあるが、それぞれが独立した論文であり、どこからでも読み始められること、いずれも記述は平易であることなど、気軽な読みものとしての利点もある。

第1章「雇用・処遇システム」で長期雇用と年功制を基本とした日本的雇用システムの特徴と今後の方向性を示し、第2章「能力開発とキャリア」で企業主導の能力開発が個人主導へと変化する可能性を説く。第3章「技術革新と仕事・職場の変化」で技術革新が仕事を単純化するのか高度化するのかを分析し、第4章「性的職域分離」で職域分離の要因とそれをのりこえる動きを示し、第5章「失業と転職」でセーフティネットの実態と「雇用流動化」について論じている。働くものの意識について、第6章「ライフスタイルと就業意識」では「会社人間」の成立とその変容としてとらえ、つづく第7章「学校から職場へ」では「就社」社会の成立とその終焉としてとらえている。第8章「生活時間配分」で労働時間問題を生活時間配分という枠組みから分析し、第9章「非典型雇用」で非典型雇用の問題を企業側と働く側の両方からとらえ直し、第10章「仕事からの引退過程」で高齢期の仕事と生活の多様性を分析している。第11章「企業と労働組合」では企業コミュニティー重視の労使関係の特徴とそれが抱える課題を示し、第12章「雇われない働き方」では個人請負、フランチャイズオーナーという働き方を雇用労働と対比しながら分析している。

初版から大きく変わった点は第12章が加わったことである。第1～11章までは8年間の変化に合わせて分析図表を更新し、新たな政策・制度に関わった加筆をしてあるが、論旨についてはほとんど変わっていない。その中で、第4章「性的職域分離」は、全面的に書き直されており、実態の紹介、理論の整理ともに多面的になっている。

リーマンショック以降の大きな環境変化によって雇用労働や労使関係が大きく揺さぶられている今日、今後の動向についてさらに踏み込んで加筆してほしいという要望は持つが、的確な展望を持った分析であったことによって、必読テキストとしての位置は十分保ち続けている。

(滝口哲史)